



「永遠の時を生きる私たち」

社会学部 1年
加藤一徳

哲学のある授業でのことである。

その日はニーチェの話を中心に講義をしていた。
自分は、ニーチェのことをよく知らず、せいぜい「病的に悲観主義で最後は狂って亡くなってしまった人」程度のことだけしか知らなかった。
しかしニーチェは私の「時間」に対する常識を無慈悲に破壊したのである。
彼の時間論に「永遠帰帰」というものがある。
これは、もし我々の世界が全く同じかたちで無限回繰り返してきたとしたら、君たちはそれでも同じ世界を生きようとするかという問いを投げかけるものであった。
その話を聞いた途端、私はとてつもない恐怖と寂寥感を覚えた。これではニーチェも悲観するに違いない、と思っていたのだが、どうもそれがちょっと違うらしい。
「永遠帰帰」という考えを認めることで、自分が真に自分の目標を達成する自由な意思を手に入れることができるのだそうだ。
たしかに、もしこれまで同じ世界が無限回続いていたとして、これからも無限回続くと考えるとしたら、私はきっと「何かしなければならぬ!」と思うだろう。

「そうか、これは果てしない絶望の中から、光を見出す、生き生きとして、豊かで、積極的な考え方だったのか」。私はそう思った。

その日から私の人生は少しだが変わったような気がした。
人生が無限回繰り返されると想像しながら、できるだけ熱心に講義を聞き、レジュメを書き、友人と語り合った。目標を達成するために努力してみようと考えようになった。これまで同じ世界が何度も繰り返されてきたとしても、ほんのわずかでも私の人生をよくしようと、前向きに考えるようになった。私の時間は本当の意味ではじめて生き生きと動き出したのである。まだ見ぬ可能性を真剣に模索しようになったのである。

哲学の授業は、私のこれまでの人生を振りかえらせてくれる。
今の私はどんな人間なのか、考えさせてくれる。
未来への可能性に向かって、生きる活力をつけさせてくれる。

ここまであなたがこの文章を読んでくれているのならば、もう一度聞きたい。

もし、我々の世界が全く同じかたちで無限回繰り返してきたとしたら、君たちはそれでも全く同じ世界を、何回でも繰り返したいと思うだろうか。

● 講 評 ●

「我々の世界が全く同じかたちで無限回繰り返してきたとしたら」。この問いに対してほんやりと思いをめぐらす筆者。永遠に繰り返されるからこそ、何かをしなければ!と気づいた瞬間、霧が晴れたように自分なりの答えを導き出していく描写がとても魅力的です。



「『ひとかどの人』を目指して」

社会学部 4年
赤間菜花

韓国に留学して日韓問題を学び、文章を書くことが大好きな私は就職活動にあたり、真っ先に新聞社を志望した。大学3年の夏、ある新聞社のインターンシップに参加することになった。「明日の午前中までに記事を一本取ってこい」前日の夜に告げられた突然の課題。朝10時に浅草にある伝統工芸品屋さんを尋ねたが、「アポイントもなしに訪問してくるなんて非常識」と叱られた。予定が狂ったためいくつかの階段や駅のホームを駆け抜け、結局会社の近くにあるショッピングモールで行われていた展示会取材し、焦りに震える指で文を綴った。この時書いた記事を、人事の方々は「このまま新聞に載せられる」と批評してくれた。今までに感じたことのない達成感に心が震え、目頭が熱くなった。

「記者になりたい」大好きな文章で、声なき声を届けられる新聞の仕事に憧れた。その一方で、記者の方から聞いた一言が引っかかっていた。「朝5時から夜12時まで、走り回る仕事」……いつ寝のだろうか?「いや、やりがいさえあればできる」無理矢理言い聞かせていたが、自己分析をすればするほど、自分はワークライフバランスを大切にしたいと考えていることが明るみに出た。それでいて、好きなことを仕事にしたいという思いも譲れない。結局、マスコミ、教育、旅行業界を30社近く受けた。

就職活動は「今までの人生、時間をどう過ごしてきたか」「あなたにこれからどんな可能性があるか」の2点を手を替え品を替え、問われ続ける。おそらく多くの学生は初めて、「自分はどんな人間なのか」と煩悶し、そして受験したほとんどの企業から落とされる。就職活動は自分の人生を試験の解答に出しているのだから、まるで今までの生き方が間違っていたかのような独特の感覚に陥る。これがきつい。

私も驚くほど落ちた。最初は気にしなかったが、6月に差し掛かると誰かが内定を取ったとかいう噂も流れ始め、だんだんと自信がなくなってきた。それでも、まだ新聞業界が残っていた。最初の試験はインターンシップに参加した新聞社からで、第1志望だった。エントリーシート、1次、筆記ととんとん拍子に来たが、2次の面接で大ミスをした。今思えば原因は他にもあったかもしれないが、とにかく私は最終面接を前に懇意にしていた新聞社にバツサリと切られた。いわゆる「お祈りメール」を受け取り、一人きりの寝室で呆然とした。ショックで何も考えられなかったが、その場でお世話になった人事の方に感謝の意をメールで伝えた。翌朝、起きる気にもならない私のもとに、返信が来た。「今回は残念でしたが、赤間さんが優秀でない、ということでは決してありません。……赤間さんは必ずひとかどの人になると考えています。前を向いて、歩いて行ってください。頑張ってください」

ひたすらに泣けた。声を上げて泣いて泣いて泣いて、ようやく朝ご飯を食べようと思った。そして不思議と、暗闇に朝日が差したようにスッキリした。結局他の新聞社の選考はすべて辞退して、私を「欲

しい」と言ってくれたある旅行社に就職を決めた。

人生に正解がないのと同じように、就職活動に正解はない。本当にそう、痛感した。「ひとかどの人」とは、「ある方向にひときわ優れている人」のことらしい。言葉を仕事にされている方だからこそこの贈り物だ。今の私には勿体ない言葉だけれど、いつかひとかどの人になれるよう、前を向いて、生きていきたい。

● 講 評 ●

たしかに、人生には正解のないことがたくさんありますね。何かに迷った時に自分でよく考えて出した結論が正解なのだと思います。筆者はこれから間違いなく、「ひとかどの人」を目指して努力を重ねていくことでしよう。



「新たな可能性を求めて」

法学部 3年
井上菜摘

一大学に入学したらたくさん勉強する!

高校3年の冬、法政大学に合格し、これからの大学生活に期待を寄せていた当時の私は、いわゆる「意識高い系」だった。受験が終わって早速、興味のあった分野の勉強を始め、大学では沢山の知識と学力を身につけたいという思いに溢れていた。

その頃の自分とのギャップを感じ始めていたのは大学2年の春、入学して気分のままあつという間に1年生が終わり新しい学年が始まった頃であった。

勉強したいという思いは持ったまま、興味のある授業を履修する姿勢は変わらず成績も普通ではあったが、何かが違う。本当にこれが私のなりたかった姿なのだろうか。その頃の私はバイトとサークルで毎日が充実していた。塾のバイトではリーダー講師に任命され運営に携わり、サークルでは後輩に勉強を教え、自分なりに懸命に取り組んでいたつもりだった。しかしいざ授業で学んだことを振り返ると、身につけているのか疑問だった。何故か、理由は明らかだった。当時の私は授業よりもバイトやサークルを優先していたのだ。確かにそれらは私にとって貴重な経験で大切なものだった。だが本当にこれで良いのだろうか、授業が自分の関心分野でないことや時間が無いことを理由に甘えているのではないか。そんなことを考えていた時、ふとあることに気がついた。

一私は本当にやりたいこととまだ出会っていない。

法律学を勉強したいという思いはあった。しかしそれだけで本当に自分の関心をわかっているのだろうか。幅広い学問を学べる大学で勉強を怠ることは可能性を狭めているのではないか。

それから私はそれらを理由に勉強を怠るのをやめた。時間は今しかないが、その今はいくらでも作り出せる。大学の授業は幅広い分野があり、これまで興味がなかった分野に気付ける最高の機会だ。無駄な授業なんてない、そう思っただんな分野の授業でもしっかり向き合い、成し遂げようと思った。

どの科目でも成績はA+を目指した。その時の私にはやる気が満ちていた。同時にどんな可能性さえも感じられた。あれだけ時間のせいにしていた自分が、今強い気持ちを持っただけでなんでも出来るような気がしてきたのだった。

その後も変わらずバイトやサークルに励みつつも勉強に励み、2年次終了時には大学から成績優秀者に選ばれた。一頑張ってよかった。他者からの評価はやはり嬉しいものだった。

この経験から得られたものは、ある学問との出会いだった。

『国際法』

私が今大学院の進学を目指す学問分野だ。2年次に履修したいいくつかの授業でこの学問と向き合い、勉強し、理論を読み解いたときの「わかった!」という喜びを感じた。ある授業の先生とはリアクションペーパーでのやりとりを通じて、学者への憧れをもったほどだった。

この出会いが私の人生を変えた。大学の授業をきっかけに興味を持ち、学習したことは大きな影響を私に与えた。1つは、サークルの国際法模擬裁判大会で個人賞1位を獲得したことだ。もう1つは、それらの喜びから、これまで就職を考えていた進路を大学院進学に変えたことだ。どちらも私の人生で大きなターニングポイントになったと感じている。

高校の頃からやりたいことを見つけている人もいるかもしれない。バイトやサークルで充実している人もいるかもしれない。しかし幅広い分野の授業を聞き、様々な知見をもち、自分の新たな可能性を見つけられるのは大学しかない。特に法政大学は基礎科目や公開科目という制度によってそれを提供している。よく、友人から「忙しい」「つまらなそう」という話を聞くと、それは可能性を狭めてしまっていると思う。今の自分とではなく、まだ見ぬ未来の自分の関心事を見つけてほしいと思う。

● 講 評 ●

ルーティン化した大学生活で、自分のなりたかった姿を自問し、大学に無駄な授業などないと気づいた筆者は、大きな変化をみせます。目的を定めて努力を積み重ね、可能性を切り開いていくなかで充実感に満ちた姿は眩しく、また頼もしさを感じました。